

茨城県ユース審判員研修会

茨城県内の高校生を集めて、関東トレセン U-13、U-14 の試合の審判を担当させていただきながら、ユース審判員研修会を開催しました。

○日時：2019年2月23日（土）～24日（日）

○場所：茨城県神栖市矢田部サッカー場ほか



○スケジュール：

2月23日（土）

9:15 審判トレーニング（1級審判員によるプラクティカル）

12:25 キックオフ（審判実技）

14:05 キックオフ（審判実技）

15:35 試合終了

19:30～22:00 講義・研修

2月24日（日）

8:20 審判打ち合わせ

9:00 キックオフ（審判実技）

10:40 キックオフ（審判実技）

12:20 キックオフ（審判実技）

14:00 キックオフ（審判実技）

15:30 試合終了

15:45 閉校式～解散

<ブラクティカルトレーニング>

① 主審の動きとポジショニング



・3人で三角形になり手でボールをまわしながら、中央にいる主審役にボールを当てる。主審役はボールに当たらないように動き続ける。

② 笛の吹き方と方向指示のシグナル



・3人で三角形になり手でボールをまわしながら、ボールをバウンドさせる。中央に主審役が入り、ボールがバウンドしたら反則の笛を吹いて方向指示のシグナルをする。

③ 副審のシグナル

・旗をもってタッチラインに立ち、スローイン、オフサイド、ゴールキック、コーナーキック、ファウルサポート、交代などのシグナルを確認。



④ 副審の動きとポジショニング

・試合中は、後方から 2 人目の守備側競技者についてラインキープをすること、オフサイドを判断するときはなるべくフィールドに正対すること、旗は主審に見えるように持つことなどを確認し、実際に動きながらスローインやオフサイドを判定。

⑤ 主審の動き方（対角線式審判法）とPA 付近の判定

・試合中の主審の動き方を体験。なぜこのような動き方をするのかを理解し、その後はその動きから実際にゴール前の事象の判定を行った。



< 審判実技（1 日目） >

何度かレフェリーをしたことがある参加者から、午前中に初めて審判について見聞きした参加者まで、経験レベルはさまざまでしたが、試合終了までしっかりと自分の任務を行っていました。



< 講義・研修 >

① 「競技規則テスト」の実施と解説

競技のフィールド、反則の判断、直接FKとなる反則、対角線式審判法
主審と副審のシグナルなどが出題され、各問題を解説し、理解を深めることが出来ました。

② 講義（2級審判員 住吉 圭介）

- ・高校生（ユース審判員）としてどのように審判活動をしていたか、どんなことを感じていたか。
- ・全小（U-12 全国大会）に参加して得たこと
- ・審判として今後の目標

③ 講義（1級審判員 川俣 秀）

- ・審判員として経験出来たこと
- ・審判員に求められること（競技規則の理解/
パーソナリティー/フィジカル）、やりがい、楽しさ
- ・サッカー、審判員の魅力について

④ 講義（1級審判員 柿沼 亨）

- ・サッカー界の仕事
- ・審判をしていて楽しいこと
- ・審判をする上で大切なこと



現役審判員3人から実体験や経験談を基に、質問をしたり、映像も交えながらよりイメージしやすく講義が行われました。

< 審判実技（2日目） >

2日目から参加の高校生にも、初日同様に基本的な副審の動き方やシグナルのレクチャーを行い2日目の実技がスタートしました。

初日に比べ、落ち着いてレフェリング出来ている姿が印象的でした。

試合前やハーフタイムには、インストラクターからアドバイスをもらい、その内容を理解し、ピッチで修正、改善する真摯な姿勢があり、吸収の早さ、前向きな取り組みが見て取れたことは研修会の大きな成果でありました。

また選手、チームスタッフ、テクニカルスタッフの方々からも、ユース審判員が真摯に取り組む姿勢を温かく受け入れて、協力して下さったことにも感謝申し上げます。

<まとめ>

初めて笛を吹く、旗を持つ高校生も含めて、沢山のユース審判員が参加してくれたことに、高体連の先生方、審判委員会のご協力、大会関係者の皆様に感謝申し上げます。

たった2日間の研修でしたが、参加者の審判技術の吸収力はすばらしく、大きく成長していく姿を見ることができました。

高校生にとっては、審判を経験することで、競技規則の理解を深め、その事が選手としても、サッカーの理解や向上に繋がると思います。

その中でレフェリーの魅力も感じてもらい、ユース審判員が更に増えることで裾野が広がり、茨城県サッカーの強化にも繋がっていくのではないかと感じています。

上級審判員を目指すユース審判員が、ひとりでも多くこの研修会から輩出されることを期待しています。

文責：川俣秀・柿沼亨

